

工芸

応募点数	53点	招待作品	18点
入賞点数	7点	展示点数	63点
入選点数	38点	◎は移動展出品作品	

(総評) 昨年度に引き続き、今日の鳥根県の工芸を拝見させていただきました。昨年はそれらがいかに多様かを確認する機会となりましたが、今年はどうか。

平成30年度の工芸部門の一般応募作品は53点。そのうち入選作は38点、受賞したのは7点となりました。昨年の一般応募作品が59点でしたから、数的には若干減少したことになります。しかし、最終的に受賞した作品はいずれも、工芸としての魅力に富んだ甲乙つけがたいもので、私を含めて審査に臨んだ皆さんの頭を悩ませる出来映えだったと思います。また、茶の湯の伝統を背景にした茶碗作品の多さ、人形や民藝陶器の秀作の多さなど、この地域の工芸の特色を実感させる入選状況は昨年同様でした。

私はやはり、「ひとつの自立した作品たり得る強さがあるか」、「オリジナルな表現意図の有無」、「フィニッシュの精度、仕上げの完璧さ」を判断基準に、あらためて入選作品や受賞候補作品を見つめ直させていただいたわけですが、全般的に見て、入選作品の完成度については、昨年に比べれば安定感が増していると感じました。ただ、サイズの大きな作品（とくに染色、陶芸）のなかには、余白が間延びして作品としてのインパクトを減じてしまっている、地（背景）と図の関係がアンバランス、あるいは単調すぎる、といった課題があるものも見受けられました。さらに言えば、作品の技法や大小に関わらず、図（絵柄、図柄）に力や勢いを感じられない、あるいは迷いのようなものが感じられるものも幾つかありました。地と図の適切なありかたは、工芸に限らず美術全般に見られる永遠の課題ですが、それを解決するには、その作品全体を一步引いて、客観的に見る視点が必要なのではないのでしょうか。そういった作業を費やしていくなかで、「自立した作品が持つ強さ」も自然と備わり、さらに「オリジナルな表現意図」も自らのなかで出てくる……。僭越ながらそのように思いました。

(文責 三浦 努／鳥取県立博物館 主幹学芸員)

知事賞 ◎

もめんてつむぎえがすりきもの おおぞら 木綿手紡絵絣着物「大空へ」 きのした えりか (出雲市)

白鳥であろうか、群れをなして上空を羽ばたいていく鳥たちの姿が絵羽全体に大らかに配置されている。その編隊のかたちや向きも、絵羽の上下で大きく変えて余白を生かし、実にリズムカルな動きを作り出している。緯絣で表現された鳥の姿は、輪郭のみで表されたもの、白く埋めるかたちで表されたものといろいろで、単調さからうまく逃れている。そして二カ所ほどに縞状にあしらわれたデザイン、これは時おり鳥たちが遭遇する上空の風、あるいは雨を表現しているのかと思うが、このグラデーションが本作に絶妙な味わいを与えている。題名からも伝わってくる作者の思いと技術とが率直に結実した、優れた作品である。

(文責 三浦 努／鳥取県立博物館 主幹学芸員)

金 賞 ④

くろがきかざりばこ
黒柿飾箱

いの うえ まさ ひろ
井 上 雅 洋 (出雲市)

この箱は指物で製作された箱です。指物とは板状にした木材を組み合わせて形作る技法です。大変美しい木目の黒柿材を使い被せ蓋の形式をとっています。形良くバランスが取れており、天面の丸み（甲盛）も良い感じに仕上げられています。

例年に比べ装飾を抑えた作品で好感が持てます。丁寧に磨き上げられた表面は木地の良さを素直に表現出来ていますが、何かしらの表面加工を施すと尚一層木目が引き立ち、有効ではないかと思えます。

今後の作品に期待します。

(文責 濱田 幸介・渡部 良和)

銀 賞 ④

たわむ
戯れ

お 村 まち こ
小 村 眞知子 (出雲市)

日常生活の一コマを形にした落ち着いた作品だと思います。お顔からは優しさや愛情が、猫に差し出した手からは思いやりを感じます。差しのべた手と猫との空間は、お互いのかけ引きさえ感じます。人形を作るうえでむずかしい品格や目に見えないものを、上手に表現した作品だと思います。

(文責 吾郷江美子)

銀 賞 ④

MAYU

かわ なべ まさ き
川 辺 雅 規 (出雲市)

有機的なフォルムが印象的なガラス工芸作品である。中心部分の赤色のガラスを核に、白色のガラスを5回被せたうえで、「被せ」という技法が生み出す層、グラデーションの美しさを熟練の研磨技術で表現している。用途としては花器であるが、「MAYU」＝「繭」ということばがほのめかす、「時間」や「空間」を懐胎するものとしてのイメージと相まって、用途性を超えた造形的魅力を備える秀作が生まれている。

(文責 三浦 努／鳥取県立博物館 主幹学芸員)

銅 賞 ④

てんくう かぜ
天空の風

うえ の ゆき み
上 野 幸 美 (出雲市)

タイトル通りの流れるような滑らかなフォルムに、まず目を奪われる作品。そして、一見磁器と見紛うばかりの丁寧な仕上げも目を引く。これは、紙粘土と和紙と胡粉を混ぜた独自の粘土を使用している。また、「見せ方」も上手く、空をイメージした青のベースに、白が鮮やかだ。ただ、それでも銅賞にとどまったのは、これらに「もう一步」の点があったからで、例えば「肩」や「足」の表現に若干「角（かど）」があるように思われる。個人的には次回は更に「具象」に振っても面白いと思う。

(文責 石村 稔)

銅 賞 ④

呉須釉海鼠流鎬大皿

かわむら

徹 (出雲市)

深い青色の呉須釉に真っ白な藁灰釉が清々しく流れる様が印象的に映る大皿である。リズムよく刻まれた鎬に、ほどよく溶けた藁灰釉が真夏の清流のように流れ込んでいる。大皿の縁にも釉が溜まるように工夫がしてあり、それが大皿に安定感を与えているように感じる。皿の立ち上がりがもう少しスムーズに立ち上がっていれば、全体的に伸びやかな印象を与えるのではないかと。まだ若い作者なので、現代的な意匠を取り入れた作品づくりに期待したい。(文責 内田 和秀)

銅 賞 ④

悠然

かわなべかおり (出雲市)

3色のガラスを宙吹き技法で鉢状に造形した作品である。本作を斜め上からのぞき込むと、青色の水面の奥のほうへ文字通り「悠然」と沈み込んでいく、丸いオレンジ色の夕日が見えてくるようだ。一方、作品を側面から見ると全面が磨りガラス状に研磨されており、奥行きを感じられると同時に涼やかな、不思議な質感を楽しむことができる。ガラスの中に浮かぶ気泡の配置のバランスなどに改良の余地があるようにも思われるが、一つの作品にさまざまな見所を組み込んだ力作として評価したい。

(文責 三浦 努/鳥取県立博物館 主幹学芸員)

入 選

題 名	氏 名	備 考
炎夏恋華	金 森 惣 司 (松江市)	
南蛮茶碗	郡 司 位 秀 (松江市)	
屈原作「天問」第八節刻字額	高 橋 成 和 (松江市)	
孫の七五三	吉 山 郁 代 (隠岐の島町)	
飴釉鉢	石 原 真奈美 (松江市)	
織部鉢	嘉 本 慎 吾 (松江市)	
④ 線香花火	大 草 章 代 (出雲市)	
「フュー」	松 本 輪加子 (松江市)	
型絵染パネル「舞う」	神 田 立 (松江市)	
藁灰釉窯変五枚皿	戸 谷 伊予子 (松江市)	
亀甲紋黒鉢	勝 部 進 (安来市)	
藁白釉楕円皿 (五枚)	永 江 妙 子 (松江市)	
抹茶茶碗 (松灰釉)	森 脇 凱 人 (松江市)	
水指 (松灰釉)	森 脇 凱 人 (松江市)	
型絵染「国生み」	月 岡 綾 (出雲市)	
紙塑和紙貼「無心」	本 常 信 代 (松江市)	
茶碗	江 村 一 雨 (松江市)	
水指	江 村 一 雨 (松江市)	

題名	氏名	備考
黄瀬戸釉幾何刻紋大皿	福間基 (松江市)	
蒟醬額「ウスバキトンボ」	山吉里織 (出雲市)	
稜線紋壺	山田正彦 (松江市)	
墨流し皿	越野良一 (松江市)	
炭化筒茶盤	小仲浩二 (出雲市)	
飴釉鉄彩彫文壺	小糠弘昭 (松江市)	
あしたへ	鳥谷幸代 (松江市)	
絵刷毛目紅葉文鉢	板倉清之 (出雲市)	
緑釉壺	田中文哉 (松江市)	
⑩ 草つ月	高梨由起子 (米子市)	
金彩茶碗	森山晴夫 (出雲市)	
⑩ 灰釉炭化花瓶	螺山勝實 (浜田市)	
⑩ 掛分花器	中尾厚子 (津和野町)	
黄瀬戸大皿	江戸端実 (大田市)	
⑩ 織部花器	江戸端実 (大田市)	
茶盤「時雨催」	嘉戸昇柏 (江津市)	
⑩ 呉須染付皿「月と太陽」	荒尾久美 (大田市)	
鉄釉塗分曼茶羅彫文皿	荒尾久美 (大田市)	
辰砂筒茶碗	水上隆 (大田市)	
⑩ 桑製和金庫	廣兼勇治 (益田市)	

招待

題名	氏名	備考
出雲焼色絵三島水指	長岡空郷 (松江市)	
⑩ 鉄釉椿文大鉢	柳楽勝重 (出雲市)	
⑩ 沈泥彩角鉢	犬山卓也 (出雲市)	
⑩ スリップウェア角皿 3客	福間琇士 (松江市)	
⑩ 瓜型壺	石飛勝久 (雲南市)	
⑩ 枳造拭漆盛器	村山創達 (松江市)	
⑩ 型絵染帯	黒川裕子 (江津市)	
⑩ 銅釉窯変花生	福郷徹 (益田市)	
榎格子八曲屏風	藤原正 (出雲市)	
ほら組織り 菱紹生絹着物「いにしへの小道」	松浦弘美 (松江市)	
⑩ 額「不昧イメージ」	石村稔 (松江市)	
縹縹幾何文花入	内田和秀 (松江市)	
⑩ 神代杉蓑盆	渡部良和 (雲南市)	
桜造拭漆銘々皿	濱田幸介 (松江市)	
⑩ 鉤窯組皿	荒尾浩之 (大田市)	
⑩ 神代杉彩飾箱	深田学 (雲南市)	
紙塑和紙貼り「恵比寿」	吾郷江美子 (出雲市)	
栓材神代櫻結界	正木潤 (出雲市)	